

はじめに

長崎の原爆被爆者の講話後に子どもたちから必ず出てくる平和教育40年来の“古典的”な2大疑問は、「そもそも、なぜ大人は戦争をするのか」と「なぜ原爆は投下されたのか」であるという。本書は、この問いに私ならどのように応えるべきかについて、関連するテーマとともに論じようとした試みである。

『人はなぜ戦争をするのか』という本書のタイトル(テーマ)があまりに大きいので、面食らう読者も多いかと思う。このテーマを詳細に論じるには、多数の著者による膨大な共同研究が必要であろう。本書はそのための「入口」を提示しようとするものである。

第1章で紹介する考古学の有力な知見によれば、ホモ・サピエンス20万年(あるいは30万年)の歴史のなかで、戦争は世界で約8000年、日本で約2000年という最近の出来事にすぎない。つまり古代階級社会の成立以来のことである。長い原始時代(猿人から数えれば700万年)において、殺人や集団暴力はあったが、戦争はなかった(集団暴力と戦争の境目は必ずしも明確でないが)。

第2章では戦争の社会構造的要因(階級格差、軍需産業など)について、第3章では生物学的背景(特に男性の暴力性)について考える。

第4章では、原爆投下の原因を考える。日本が始めた15年戦争、ナチスの脅威が引き金となった米国の原爆開発計画などである。

第5章では、集団的自衛権法制化以降の現代日本がかかえる戦争のリスクについて考える。その歴史的社会的背景として、明治から昭和までの日本が戦争に明け暮れたこと、戦後日本が軍事大国アメリカに「従属」していることが、特に重要である。

第6章では、人類の長期的な暴力減少傾向のなかで20世紀には技術の発達に伴う大量の戦争死者も出たが、万年単位の人類の将来のなかでは、石油文明(核技術を伴う)が終焉に向かって再生可能エネルギーの時代になり、世界人口も減少するなかで、戦争克服の可能性が出てくることを示唆したい。

第7章では、以上をふまえて平和教育の方向性について考えてみたい。